

大乘

DAIJO 法話

人は去っても



北海道・善行寺住職
なわ こうじょう
名和 康成

今年も、もうあとわずかとなりました。皆さ
まほどのような一年をお過ごしになられたで
しょうか。一年を振り返るとき、その年にあっ
た出来事とともに思い起こされるのが、「大切
な方との別れ」という方も少なくないのではと
思います。

今年も、私にとっては母方の祖父母の三回忌
にあたる年でした。早いものです。二人が亡く
なって二年が過ぎ去り、私にはもうこの世で
「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼べる人が

たということ、この文言によって、亡くなっ
た方の在りし日の姿を思い出し、そして死して
今なお「繋がり」があるというところに喜びと
安らぎを感じていらっしゃる方が多いというこ
となのでしょうか。特に生前にかけられた言葉は、
声とともによく記憶されているような気がいた
します。言葉を思い起こすと、今でも亡くなっ
た方とまるで出会っているような気持ちになる
ことさえあります。

私の祖父母は、長崎県に住んでおりました。
遠く北海道のお寺に嫁いだ娘の産んだ子とい
うこともあってでしょうか、本当によくかわい
がってくれました。母が幼い私を連れて里帰りし
た際には、祖母はうれしそうに、「あんたが生
まれたときに一番に抱っこしたのは私なのよ」

いなくなりました。

人は去っても、その人の微笑みは去らない
人は去っても、その人の言葉は去らない
人は去っても、その人の温もりは去らない
人は去っても、拝む手の中にかえってくる
もう何度も目にしたことがある文章です。し

かし、見慣れたはずのこの文章が、祖父母が亡
くなり、その姿を見ることができなくなるこ
によって、あらためてしみじみと心に味わい深
く感じるのです。たくさんの方々から語られてき

と言うのが口癖でした。晩年は昔の記憶が曖昧
になることが多かったようですが、「あんたが
生まれた日のことは、決して忘れないよ」と言
い続けてくれた祖母でした。

教育関係の仕事に長年携わっていた祖父の言
葉もまた心に深く残っています。布教使でもあ
る私は、人前でお話をする機会が多く、そのこ
とで悩むこともあり、祖父にアドバイスを求め
たことがあります。祖父も晩年は認知症が進
んでおりましたが、そんな中、「お話をすると
きはね、わかりやすく伝えるようにこころがけ
ること。誠意をもってその場に臨むこと。自分
がよく理解したことを話すことだよ」と教えて
くれました。そして「康成くん、お坊さんとし
て北海道で精いっぱい頑張るんだよ」と言って

くれたのが、今生で交わした最後の言葉となりました。

今はもう二人の姿は目にすることはできません。しかし、祖父母の優しい微笑みとその温もり、忘れ得ぬ言葉の数々は、その声とともに私の心の奥底に刻まれています。そして二人のことを思い念仏申すとき、今度は私の口から出る「南無阿弥陀仏」となってこの私を支え、励まし、教え導いてくれていることをよろこばせていただくのです。

願土がんどにいたればすみやかに

無上涅槃むじょうねはんを証しょうしてぞ

すなはち大悲だいひをおこすなり

これを回向えこうとなづけたり

(註釈版聖典581頁)

浄土に往生した人は、すみやかにこの上ないおさとりをひらき、大いなる慈悲の心をおこすのです。そして迷いの世かえに還り来て、私たちが真実の道へ導こうと常にはたらかれるのです。それらは全て阿弥陀如来の本願のはたらきによってなさしめられるのであるということを、親鸞聖人はお伝えくださいました。

手を合わせるということは、簡単なようで、これが実は難しく、ましてお寺に足を運び、お聴聞するということは、なかなかできることではありません。亡くなった方との別れをご縁として、そのようなことができるようになったという方が多いのではないのでしょうか。拝む手も、そして私の口から出るお念仏さえも、それは浄土へ先立っていかれた方がこの世界かえに還り来て、



カット 長井多美栄

阿弥陀さまのみ救いと一体となって導いてくださっているのです。そのことを「人は去っても、拝む手の中にかえってくる」との言葉の中に味わわせていただきます。そして、み教えの中に生きる亡き人との繋がりに支えられつつ、お念仏を申し、お聴聞する身に育てられていたことをあらためて知らされるのです。

私の祖父母も、そして皆さまの懐かしい方々も、今なお私たちをお育てくださっています。今年もまた、私たちはそれぞれに阿弥陀さまのお慈悲の中に歩ませていただきました。年の瀬にあたり、別れの中にもある確かな出遇あいに思いを馳せ、来たる年もまたお念仏の日々を送らせていただきますよう。